

### 第5回

### 齋藤先生のレッスン



オーケストラのリハーサル。齋藤秀雄先生(手前)と共に。

連載第3回ではのんびりした高校生活の日々をお話しましたが、大学生になると学生生活に休日ほとんどありませんでした。学校の授業は月曜から金曜までですが、金曜夜は学校のAオーケストラ(上級生のオーケストラ)の練習があり、土曜は朝から夕方までBオーケストラ、Cオーケストラ、音楽教室のオーケストラの練習。日曜は一日中指揮のレッスンで、そのあと居残って、下級生が齋藤(秀雄)先生のレッス

ンへ持つていく前の仕上げを見てあげねばなりません。これは上級生の役目で、僕が下級生の頃は小澤(征爾)さんが見てくれました。僕たちは齋藤先生のレッスンのためにグループを作つて勉強しました。メンバーは、僕、飯守(泰次郎)君、黒石(英臣)君、若杉(弘)さん等。若杉さんは芸大生でしたが、齋藤先生のとこにこっそり習いに来ていました。ピアノでレッスンするので、代わりばんこに2台

ピアノを弾いては指揮をして、お互いに指摘しあいます。ここできちんと弾けて振れるよう仕上げから齋藤先生のレッスンに持つていくのですが、前日の晩は徹夜で勉強しました。齋藤先生のレッスンはいい意味で本当に怖かったですから、僕たちは必死でした。

ドイツで長いこと勉強なされた齋藤先生はドイツものが本当に得意で、僕たちにも詳しく教えてくれました。サイトウ・キネン・オーケストラでモーツァルトやブラームスをやると、誰も何も言わなくても、指揮棒をポンと下ろしただけで気持ちよく音が集まる。齋藤先生の音がするんです。各人が世界各地のオーケストラで経験を積んで戻つてきて、何も言わずに音楽の方向がピタリと揃う。何十年経つてもその音楽が身についているんです。それだけ齋藤先生の指導は偉大でした。

齋藤先生の指揮は四角四面で縦線を合わせるだけ、あんなにつまらない音楽はない、と齋藤メソッドを批判す

る人もいます。外からはそう見えるかもしれませんが、齋藤先生が教えたことはそうではなかった。言ってみれば齋藤メソッドという指揮法の原則をきちんとマスターした上で、あとは自分で肉付けして自分の音楽を作れ、というものでした。

亡くなる2日前に齋藤先生は「俺は悪い教師だった」とおっしゃるんです。「すぐ怒つたよな」と。そして「堪え性のない教師なんて最低だ。お前らには悪かった。ごめん」と言い、「これからはお前たちが教える立場なんだから、徹底的に自分を抑えて、最善の教え方を研究しろ」。僕たちはその言葉を涙しながら聞いていました。



©川村悦生

### 秋山和慶

1941年生まれ。64年2月に東京交響楽団を指揮してデビューのち音楽監督・常任指揮者を40年間務める。東京交響楽団桂冠指揮者、ミューザ川崎シンフォニーホール・チーフアドバイザー。